

2 敷地外郭施設

敷地外郭施設 ドゥオンラム村の伝統的な屋敷地では、周囲に塀を巡らせ、門や付属屋などを道に面して建てる。こうした敷地を取り囲む外郭施設が道に沿って連続し、道脇に通される水路とともに、ドゥオンラム村の主要な集落景観を形成する。

これらの外郭施設の構造は、ラテライト積や煉瓦積を基本とする組積造で、多様な組積材によって構成される。ここでは、その組積材の種類を眺めつつ、ドゥオンラム村の伝統的な敷地外郭施設の特色について述べたい。

組積材の種類 塀・建造物の外壁・門・水路に用いられる組積材は、ラテライト、日干煉瓦、煉瓦、土・小石・煉瓦片をモルタルで固めたモルタルブロック、の大きく4種に分けられる。なお、煉瓦には、小口に穴をあけたものも多くみられ、扁平で硬く焼き締めたものや、紫色の色味をもつものなど、多様な種類がある。

これら組積材で最も大きなものは、ラテライトで、

以下、日干煉瓦、モルタルブロック、煉瓦の順に小さくなる。伝統的な組積材はラテライト、日干煉瓦、煉瓦で、煉瓦は穴あきのものが新しく、近年ではモルタルブロックも多く用いられている。

こうした組積材は、混在しつつ用いられることが多く、目地には土やモルタルを使用し、モルタルを多く使用する場合は、これに規則的に線を描いてブロック状にみせる。近年では、壁面全体がモルタルで塗り込められる。

塀と建造物 道に面する塀や建造物の外壁は、連続した壁面を形成し、ドゥオンラム村の主要な集落景観を構成する。その伝統的な外観は、控え壁の有無により、大きく2つに分けられる。

まず控え壁を備えない壁面は、いわゆる布積のもので、ラテライトや日干煉瓦など、比較的大きな組積材を積み上げるものが多い。こうした積み方が施された付属屋は伝統的な様式を伝え、塀はやや高さの低いものになる。ただし、一部には、下層をラテライトとし、上層に日干煉瓦や煉瓦を積む複合的なものもみられる。

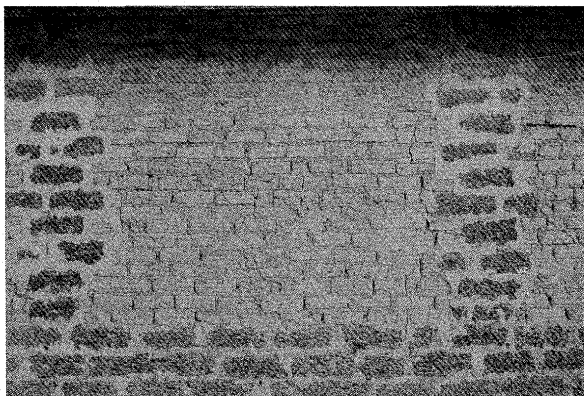


図6-6 組積材 ラテライト、日干煉瓦



図6-7 組積材 ラテライト、日干煉瓦、煉瓦、モルタルブロック

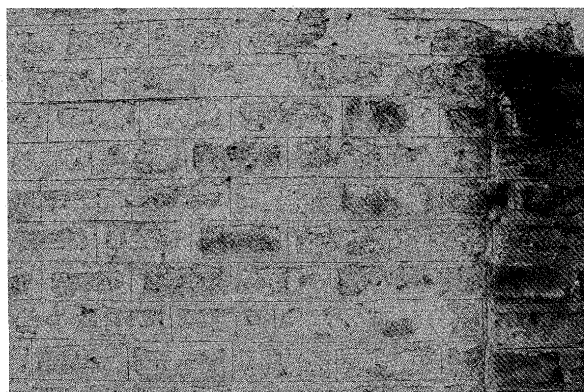


図6-8 組積材 モルタル塗り、ブロック状線刻

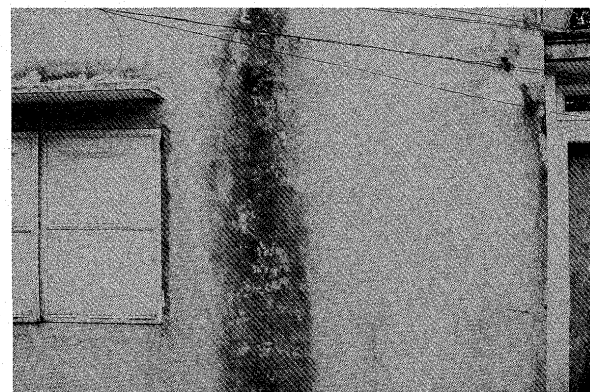


図6-9 組積材 モルタル塗り込め

一方、控え壁を備えるものは、伝統的な煉瓦や小口に穴をもつ煉瓦など、比較的小さな組積材を用いるものが多く、ラテライトや煉瓦で積んだ控え壁の間に、煉瓦を長手積として壁面を形成する。こうした控え壁を備えるものは、その強度から高く積み上げるものが一般的で、控え柱が一定間隔に配される外観に特徴がある。

なお、下層をラテライトとし、上層を煉瓦とする複合的なものもみられ、小規模な建造物の外壁や塀の面積が狭く、低い場合は、控え壁を備えないこともある。また、壁頂は小口積で水切り風にし、あるいは立てた煉瓦やモルタルで縁取るもの、フランス瓦を葺くものなども見られる。

こうした多種の組積材と異なる外観から構成される壁面が、各屋敷地や同じ屋敷地でも混在して連なる。付属屋では道に面して鉄扉や木扉を備えた窓を開け、上部に庇を設ける場合も一部で見られる。

ただし、キリスト教教会の塀などの例外があるものの、近年のものはモルタルブロックが多用され、壁面も全体がモルタルで塗り込められ、組積材の種

類が判別できないものも多くなりつつある。

門 塀や建造物の外壁とともに集落景観の重要な要素を担うのが、各戸に建てられた門である。門は、屋敷地にいずれも一カ所構えられる。道に面して直接門戸を開くのが一般的であるが、やや奥まって設けられる場合もみられる。また、道より敷地面が高い場合、門の前面にスロープを設ける。

これら屋敷地正面を飾る門は、いずれも組積造の門柱に鉄や木の内開き扉を備え、一部には付属屋と一体となったいわゆる長屋門の形式もみられる。こうした門の外観を特徴づけるのは屋根形式で、切妻屋根、片流れ屋根、無屋根、陸屋根の大きく4つに分けることができる。

最も伝統的な様式をみせるのは切妻屋根の門で、組積造の柱に木造小屋組の切妻屋根を架ける。両側面は組積造の壁を袖壁状に立ち上げ、屋根葺材はシングル葺、フランス瓦葺とし、一部には草葺のものもある。こうした門の柱や壁の表面を漆喰で塗り込め、まぐさをアーチ状にする丁寧なものや、正面に年号などを掲げるもの、さらに上部に小屋根を架け

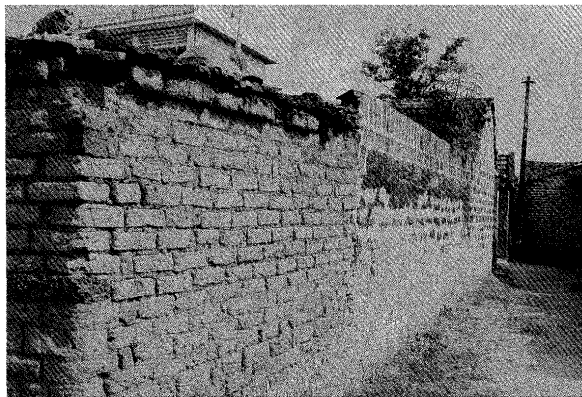


図6-10 壁面の構造 控え壁を備えない壁面

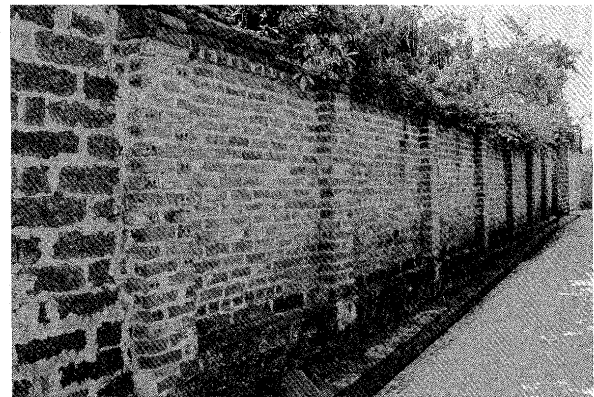


図6-11 壁面の構造 控え壁を備えた壁面

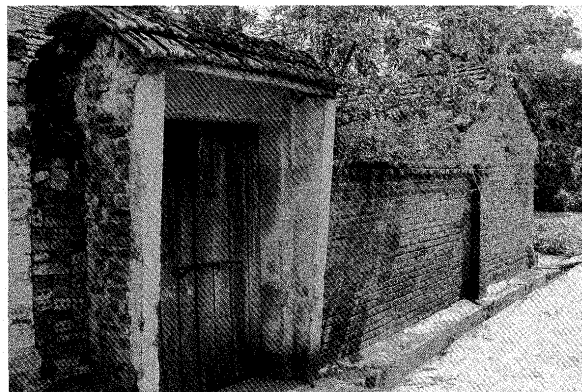


図6-12 門の形式 切妻屋根の門



図6-13 門の形式 片流れ屋根の門

るものもみられる。

次に伝統な様式をみせるのが、片流れ屋根の門である。門正面上部に組積造の壁を立ち上げ、背面に木造小屋組の片流れ屋根を架けるのが代表的で、一部には正面側を切りつめた切妻屋根もみられる。両側面は、組積造の壁を立ち上げ、漆喰で丁寧に塗り込めて柱形を造り出す。屋根葺材はフランス瓦が多く、一部には波形スレートのものもある。正面上部の壁は額縁状に漆喰で造り出すものが多く、ここに年号や祠堂銘が掲げられる。さらにアーチ状の破風や装飾的な柱頭を載せるなど、上部を洋風の意匠で飾るものも多い。

一方、こうした片流れ屋根の門の背面の屋根を省略し、正面をさらに飾りつけたものが、無屋根の門である。門の正面外観は、片流れ屋根の門と同様であるが、門柱を漆喰で塗り込めて丁寧に造り出し、コーニスやアーチ状の破風を備え、さらに門柱上部にファイニアルなどを載せるなど、外観は装飾性に富んでいる。

これらの門に加え、近年みられるのが、陸屋根の

門で、コンクリート造もしくはブロック造の門柱に陸屋根を載せるのみの簡素な造りをみせる。門柱表面は全てモルタル塗りでブロック状を呈するものもあり、陸屋根上部に額縁上に壁を立ち上げ、年号を掲げるものもある。

なお、最近のものは組積造の門柱のみを備えて、フェンスの扉とするものが多く、より単純な造りのものになりつつある。

これら門の装飾性は細かくみると上記4つの形式以外にも数多くの例を見出せ、枚挙にいとまがない。だが、こうした多様な門が道に面して開かれ、塀や建造物の壁面と一連となり、集落景観の構成上、重要な役割を担っている。(清永洋平)

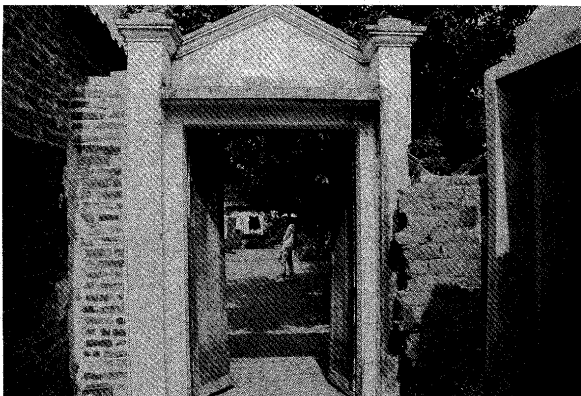


図6-14 門の形式 無屋根の門

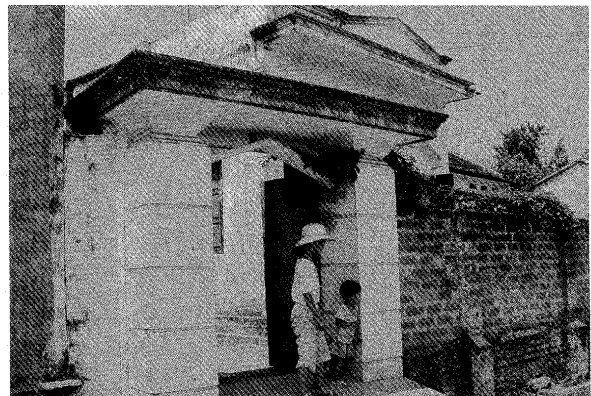


図6-15 門の形式 陸屋根の門

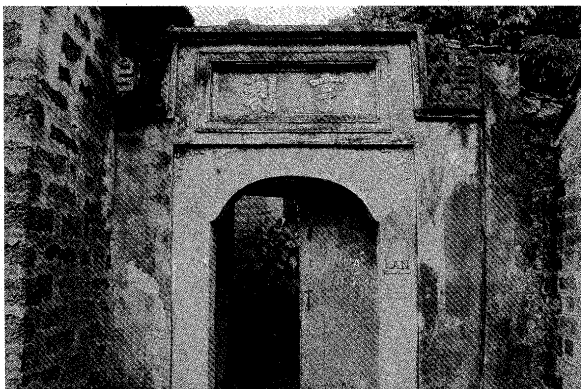


図6-16 門の上部



図6-17 門の上部